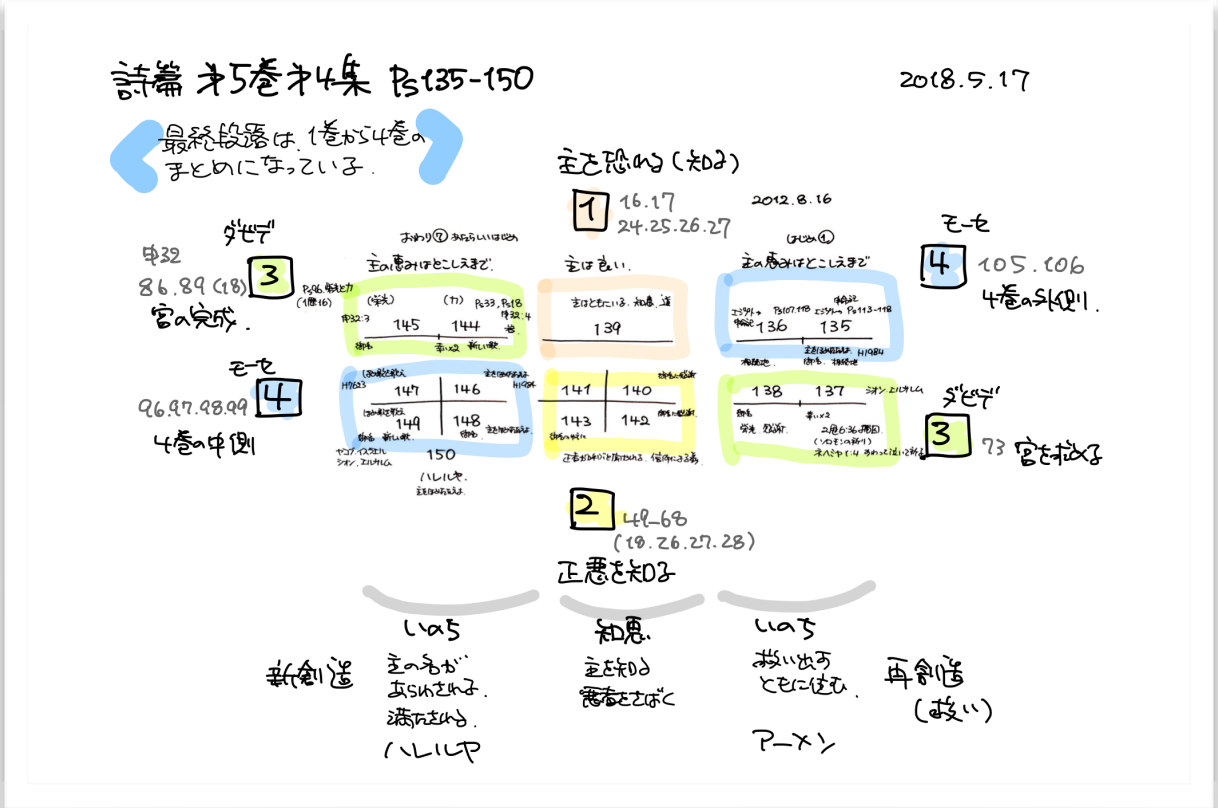
詩篇第5巻第4集

詩篇135-150篇の配列構造



詩篇の第5巻、第4集。最後の詩篇集です。135篇から150篇。

150篇は、アーメン、ハレルヤの長いものということで、閉められていると思いますので、135篇から149篇までを前回2012年に分析した紙がありますけれど、分け方は同じで良いと思いました。ただし、そのつながりのところをもう少し正確に見ないといけないということで分析しています。

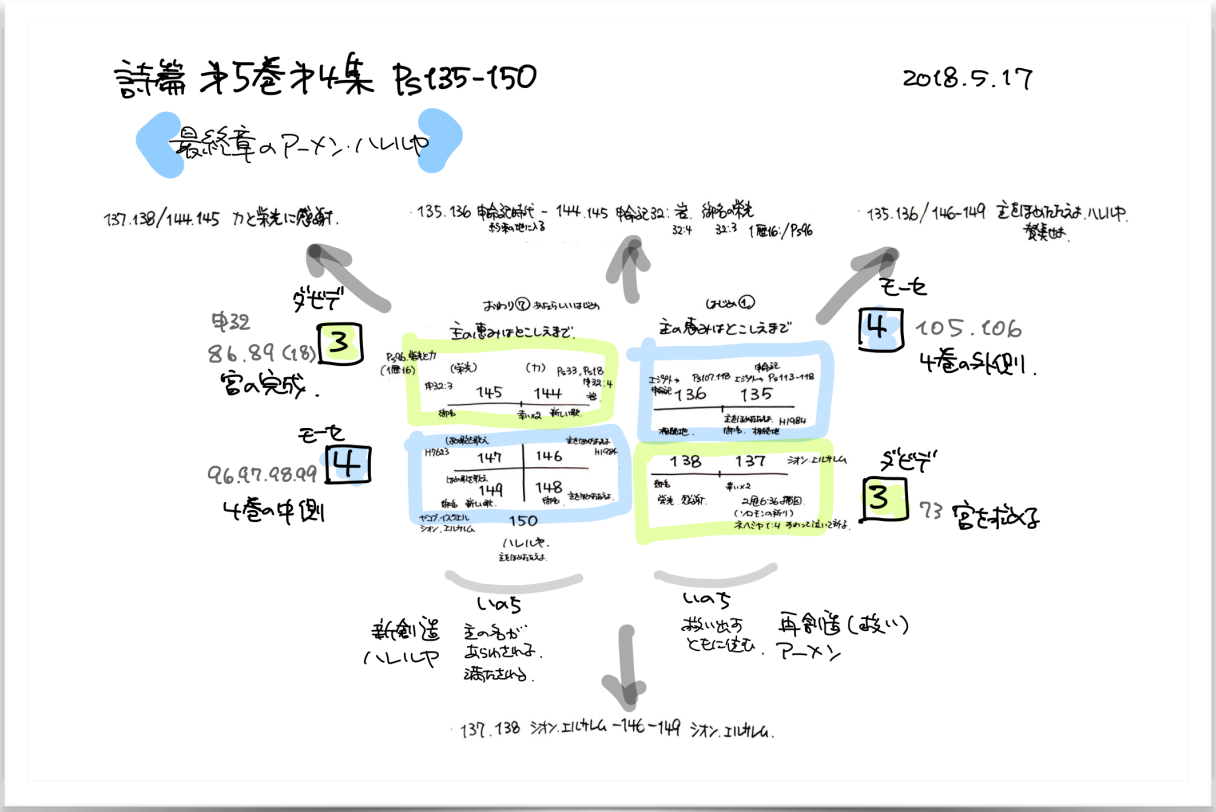
全体は、「主に感謝せよ。主はまことに良い。その恵みはとこしえまで。ハレルヤ。」という「主の恵みはとこしえまで」という民の応答をフルコーラスで言ったものです。それは、118篇もそう(同じ言い方)です。この言い方が、全体を構成しているというふうに見ています。

最初のハレルヤ(右の上下135,136/137,138)と最後のハレルヤ(左の上下145,144/146-150)。(最初のハレルヤは)出エジプトのハレルと言われたりします。大ハレル。過越の祭りに読んだりするもの(右の上下135,136/137,138)というように言われたりするものと、ここも(左の上下145,144/146-150)ハレルと言われたりするようですけれど、初めの救いと救いの完成のような形かなと。135篇、136篇は歴史を言っているところです。歴史を言っているところは、第4巻の終わりの105篇106篇に似ているということがあったり、146篇から147、148、149篇あたりが、第4巻の96、97、98、99篇あたりに似ているかなと思ったり、140、141、142、143篇を見ると、題にもダビデとついていますけれど、第２巻のダビデが悪者と戦っているというようなところが、ここに似ているの

があるねということ。それと、144篇が敵からの救いで平和に導きます、145篇が憐れみ、恵み、御名の栄光があらわされていますというようなところなのですが、こちら(144、145篇)が、86篇、89篇あたりの第3巻の完成の部分に、もしかすると似ているねと。申命記32章4節(144篇)、32章3節(145篇)の救いの完成あたりの詩篇に似ているねということで見て、137篇と138篇を見ると、エルサレムを思う、聖なる宮に向かってひれ伏すということなので、この2つが第3巻的なものかもねと。

じゃあ、残っている139篇が、1巻的なものであれば、最後の詩篇135篇から150篇のところは、詩篇全体、1巻から4巻のまとめて、アーメン、ハレルヤと歌っているものになるのかなということで、139篇を見ると、正しい者の道、悪しき者の道に歩まずという1篇や、25篇、26篇、27篇、16篇、17篇のことを思い出しても良いのではないかなと。主を恐れる者の知恵ということで、4巻/3巻、1巻/2巻、3巻/4巻という救いの完成を「アーメン。ハレルヤ。」と言って歌っているのかなと思われます。

最初の４巻と３巻。こちらは、救い出された。最後の3巻と4巻こちらは、救い出された者が成就して満たされるということで、こちら(4巻/3巻)は、救い出すほう。こちら(3巻/4巻)は、主の御名が十分にあらわされているほうということで、再創造と新創造みたいな。同じことなのですけれど、再創造と新創造の初めと終わりの違いなのかもしれないということで、135篇と144篇からの部分を比べたりしています。



その4つの段落を比べているのがこの表です。第4巻的なもの、第3巻的なもの。上の2つ、下の２つ。その共通点がここに書いてあります。(上の2つ)135、136篇と144、145篇は、申命記の時代、約束の地に入るところを思い出すようなものではないかと。137篇からと146篇からの下の2つは、シオン、エルサレムが出てきますので、神殿、新しい都のほうに目がいっている、集中しているということかなと。この斜めのところ(4巻、

4巻)は、主をほめたたえよ、ハレルヤ、賛美せよという共通点です。こちら(の斜め3巻、3巻)は、力と栄光に感謝するところじゃないかなと言っているのがこの表です。

ただし、この表を見ながら、3巻と似ているところは、まだよくわかっていません。2巻のところも、どの詩篇がどういうふうに似ているのかを全体構造と一緒に見て、確かめなければいけません。それと、107篇からと113篇からの第5巻の出だしのところ「主に感謝せよ」の部分と、最後の「主に感謝せよ」の部分の区別。これも、初めの救いと終わりの救いなのか、今見る限り107篇のほうは「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。」から始まるのですけれども、どちらからというと、ダビデ的な感じがします。107篇からと113篇からは。

最後の135篇からのところは、アブラハム、モーセ的な感じがするので、どちらが先で、どちらが終わりなのかというところが、まだ見えてはっきり定義できていませんけれど、詩篇全体のメッセージと最後の段落がまとめになっているという、最終章のアーメン、ハレルヤ、もしくはハレルヤに囲まれて真ん中がアーメンなのかもしれないのですけれど、アーメンとハレルヤということばでまとめられるこのまとめが、1巻から4巻までを全部思い出せと言われているのも、妥当だと思います。黙示録みたいなものです。聖書全体をもう一度振り返って「ハレルヤ、アーメン」と言っているような箇所がありますよね。そういう書物にも似ているものだと思いますので、2巻3巻の分析がまだ終わっていませんので、2巻3巻の分析が終わったところで、もう一度、見直さないといけないということです。